随想　アベノミクスとその反応

～景気の〝気〟は気分の〝気〟～

加藤　宏光

昨日愚妻と銀座へ出かけた。銀座三越デパートでラデュレというフランス菓子を売る店にある喫茶店へ入ろうとした。最近でこそ日本でもあちらこちらで見かけるが、かつてパリで訪れた思い出のある菓子を食べたくなったからである。

延々の待ち行列。店員に聞くと一時間を超えそうとのこと。同デパートのハロッズ（これはロンドンのデパートハロッズをモデルとしている）も同様である。

あきらめて、ワコー（セイコーホールディングス㈱資本であったと思う）の喫茶へ向かった。ここでも十数人の待ち行列があったが、「これくらいなら…」と待つことにした。改めて有楽町から銀座の通りを思い起こすと、歩きづらいほどの人込みであった。歩く人々の中には外国人も多い。

昨年末に安倍晋三氏が総理大臣に就任し、アベノミクスを打ち出して以来、円は八〇円台から一〇二円にまで急落した。これには黒田東彦新日銀総裁の異次元金融緩和が果たした心理的な影響も無視できない。

それにしても、円が急に下がった影響がそれほど実態経済に直結するわけがない。円安に影響を受けて投資マネーが国債から株へと移動したことで急騰している株価に影響を受けるように、上場企業の利益は大きく伸びている（上場企業の利益が平均二四％強増加とのこと：五月二十三日朝日新聞）。しかしそれにしても、サラリーマンの給与が急に多くなったわけではない。つまり、街の好況はムードに引きずられた結果であろう。

五年近く前であったろうか、リーマンショックの前に、ミニバブルがあった。その時は、静かにしかし長期に渡って好況が継続した（二〇〇三～二〇〇七年岩戸景気を抜く長期好況といわれた）。マスコミは「サラリーマンには還元されない好況」と評した。それでも、高級時計を扱う店で一、五〇〇万円や三、五〇〇万円の時計が多く展示され、二〇〇～三〇〇万円の物は当たり前のように売れていた。このことは本随想でも紹介したことがある。

一昨日テレビ番組で『景気』という言葉に『気』が付いている。つまりは景気は気分で左右される、ということなのです」と紹介されていた。好況に沸く街を行く人々には、変哲もない若いカップルやサラリーマングループが多いことは服装から見て取れる。春でもあり、街行くみんなの顔は何となく華やいでいる。

先のテレビ解説のように、彼らの多くは、昨年来の半年でとくに目立った収入の増加があったわけではあるまい。それでも、これだけ街が活気づいているのは、彼らの消費が上向いているからである。事実、デパートの売り上げは高級品を中心に伸びているという。

四月四日の日経新聞三一面に「変わる企業地図－動き出す政策効果」というコラムがある。その中に「名古屋三越で二〇〇万～三〇〇万円の高級時計が次々に売れ、三〇～四〇歳代の男性が数十万円台の時計を購入する例も増えている。（中略）東京等から始まった高額消費の裾野が地方へ広がりつつある。種々の要因で昨年十一月から日経平均株価は四割強上昇している。高額消費の中心は株式投資や投資信託等の金融資産を膨らませた人たちだ。東京ではレストランやプチ高級品の分野でも消費意欲が高まっている。（中略）財布のひもを緩めているのは多くの金融資産を持っている人ばかりではないようだ」としている。

これまで沈滞した日本のムードの中で、「倹約したいから」というよりは「金を使うことへの気兼ねから」消費を控えていた人は多いと思う。

アベノミクスで日銀が一三〇兆円もの金額を補充し、公共事業でその金をばらまく、と安倍総理と黒田日銀総裁が明言した（だから、民間もそれに追随して投資をし、事業を拡大拡充した上で従業員の給与を引き上げて欲しい、と続くのが「3本の矢」である）。これに引きずられて上がった株価で、金融資産により多くの利益を得た一部の人々が高額消費意欲を燃やし、マスコミがそれを煽り、そして一般人がそれにいま乗り始めた。バブル経済のお膳立てはできた。加えて安い円と外国人の来日でさらにムードが煽られている。

皮肉に見れば、株価が上昇するということは、投資資金が安定した国債から株式市場へ大量に流れ込んでいるということを意味している。ファンドマネーを含む投資資金はこれまでの沈滞した経済下で利率は低くても安定性が抜群の国債へ逃避していた。しかし、このところの安倍政権への高い支持率や黒田総裁の強気の発言に加えてアメリカの底堅い経済回復基調を見て「経済市況は手堅く進展し始めた」と判断する向きも多いはずである。こうしたトレンドが資金を国債から株式市場や投資信託市場へと偏向させている。

しかし、このトレンドに気を取られ「国債の魅力が相対的に低下している」という現実を見逃しがちである。株価が上がるのは「経済基盤が復調してきている」という見通しで強気になっている投資家がいる、ということ。

その反面この数日の乱高下。五月二十八日の日経新聞一面では、株式市場の乱高下を大きく取り上げている。その中で「前週に上下一、〇〇〇円以上振れ、また二十七日にも大幅に下落した。終値が前週末に対比して四六九円八〇銭安く、一万四、一四二円であった。二十三日の一、一四三円安に次いで今年二番目の安値水準である」ことを報じている。

大方の見方は「一本調子の上げに対する単なる調整の下げ」としているが、消費に裏付けられた製造業の基盤が整っているわけではない現状は大きな不安定要素を含んでいる。

さあ、これからが本番であろう。実質経済がしっかりとついていけるか。現在の卵価は再生産が不可能なレベルで、早期淘汰が声高に主張されている。ブロイラー業界も飼料高と生産過剰に苦しんでいると聞く。

どうにかこれからの日本経済に追随して、おいしい汁を味わいたいものである。

店を離れて歩行者天国をたどり始めた時、横見をしながらレコード店を出る若い女性とぶつかりそうになった。危うくかわした著者に「ソーリー！」と彼女は会釈をしながら言った。どうみても日本の現代っ子と見えた彼女は、多分中国人なのであろう。

日本の好況感を下支えするのに、こうした若い世代が気軽に海外で消費する気運も大きな影響力を持っていることを痛感した。これも円安の一側面ではある。